

チンギス・ハーン 御伽噺

チンギスとあらば疑え！

●今年にはチンギス・ハーンが戴冠してからちょうど800年になる。そこで、モンゴル国では政府の肝いりで「大モンゴル国建国800周年」として数々のイベントが企画されている。インターネット上の公式ホームページによれば、1月1日から12月31日まで、およそ60のイベントがあり、その結果、365日のうちのおよそ70日間は祭りで充たされる。例えば、7月15日には800人の馬頭琴奏者と800人の民謡歌手による大規模なショーが予定されており、それとは別に馬頭琴歌謡コンサートが11月19日に開催されるらしい。また、「チンギス・ハーン騎馬隊」と称せられる野外ショーの公演は31回予定されているが、これは30年前にあの大阪万博を取り仕切った、堺屋太一氏がプロデュースしている。彼らのお祭り騒ぎは、日本とまったく無関係なわけではないのである。

●モンゴル国内において、チンギス・ハーンを祭るための準備はすでに昨夏から始まっていた。まず、社会主義を象徴してきた広場にあった英雄廟は取り壊され、中にあったとされる革命の英雄チョイバルサンの遺体とスフパートルの遺品は秘密裏に火葬処分された。代わって現在、博物館や迎賓館などのあるチンギス・ハーン複合施設が建築中である。一方、チンギス・ハーンの誕生年については学説が3つあるにもかかわらず、誕生日は7月11日と確定された。この日は奇しくも、スポーツ祭典ナードムを開催する日である革命記念日でもある。言い換えれば、社会主義化の革命記念日に、民族英雄の誕生日を重ね合わせることによって、「歴史の書き換え」が如実に行われているのである。

●民主化後の10年間に大学で書かれた卒業論文の多くはアイデンティティをテーマとしており、その多くがチンギス・ハーンの研究であった。こうした現象は、社会主義の崩壊が人々にアイデンティティ・クライシスをもたらしたことを示すと同時に、民族アイデンティティの象徴としてチンギス・ハーンが求められやすいことを示している。民主化直後の混乱期である1992年に製作されたモンゴル映画「チンギス・ハーン」は、単なる歴史物語ではなく、混迷の時代にリーダーを呼び求める、現代モンゴル人の姿を描いた作品であった。今日でもなお、カリスマ性をもつ政治的リーダーは登場していない。だからこそ、「大モンゴル国建国800周年」は平和裏に企画され、ポスト社会主義時代のモンゴルを示す象徴となっている。

●一般に、社会主義時代に禁じられていたからこそ、社会主義の終焉に伴って民族英雄の崇拝が「復活」と考えられている。モンゴルでも人々はそのように理解している。しかし、社会主義時代以前にすべてのモンゴル人が現代のようにチンギス・ハーンを尊敬していたわけではなさそうである。例えば、スウェン・ヘダイン調査隊の一行が録音した民謡資料のなかで、「父チンギス」と題された歌の楽譜は、1905年に日本で作曲された軍歌「戦友」（ここはお国を何百里…）のメロディにほかならない。どうやら、日本が大陸に進出し、現地の学校や軍隊の近代化を試みる過程で、チンギス・ハーン崇拝も形成されたようである。羊肉料理として有名なジンギスカン鍋も、日本人による創作料理である。なぜ日本人はかくもチンギス・ハーン好きなのだろうか。現代の御伽噺を読み解くために、まずは、かの地へお出かけあれ。各種イベントが日本人観光客を待っているに違いない。



こながや ゆき
小長谷 有紀

国立民族学博物館研究
戦略センター 教授